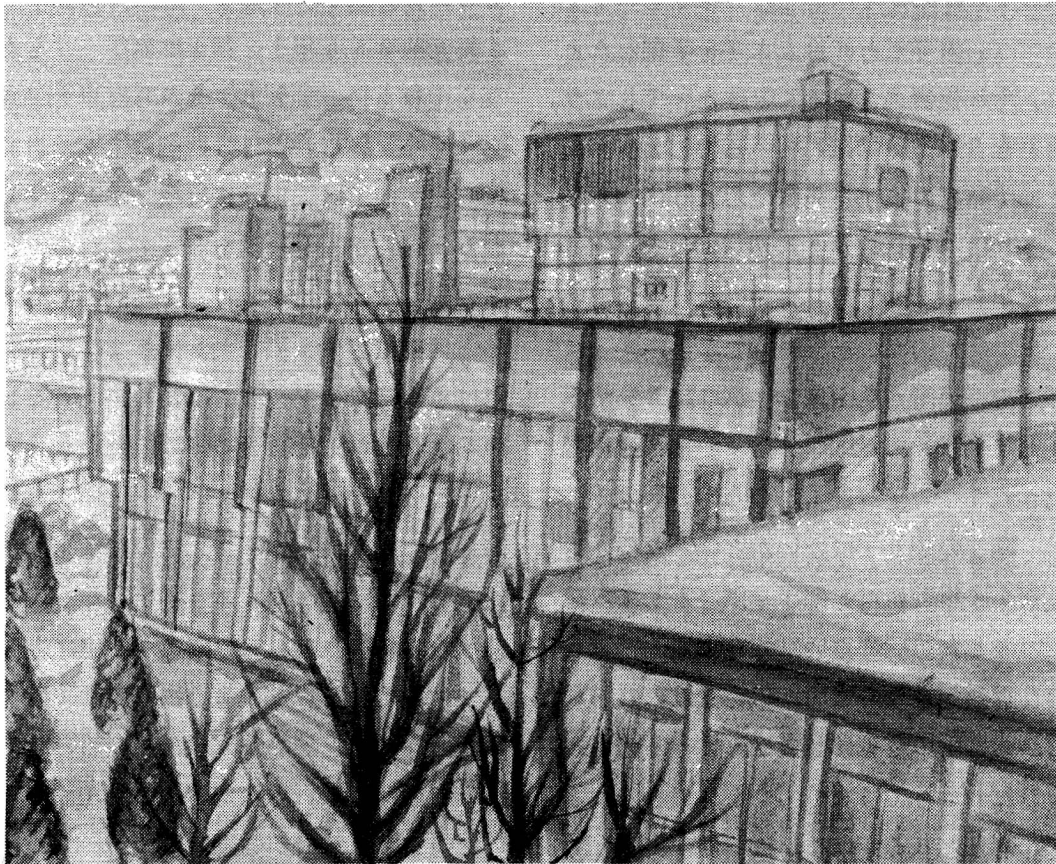


# 学園ニュース

富山大学  
No.44

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 59 年 3 月 21 日



学内風景（その9） 附属図書館 斉藤喜代美

## 目

## 次

卒業生へのはなむけの言葉	各学部長及び経営短期大学部主事	2
退職者のあいさつ		7
新任教官紹介及びあいさつ		12
公開講座委員会報告	公開講座委員会委員長（教養部教授） 藤井昭二	13
「出会い」—西ドイツ留学だより—	教育学部中学校教員養成課程（音楽）3年生 内田良美	16
「私の心のふるさと富山」	富山県費留学生（教育学部）坂尻まゆみ（ブラジル）	17
《来てよかった・・・》	富山県費留学生（工学部）久保田・パウロ・欣也（ブラジル）	18
学部・学生部だより		19

## 卒業生諸君へ

人文学部長 楠 瀬 勝

諸君は、ここに4年間の大学教育を終えることで、また小学校以来16年間にわたる学校生活を全うすることにもなります。人文学部卒業生の場合、さらに進学して学業を続ける人もありますが、大多数の諸君は様々な職業に従事することになりましょう。諸君は今、卒業の喜びをかみしめているとともに、新たなる希望とこれからへの決意にもえていることと察せられます。

現在の社会では、大学ことに地方大学を卒業したというだけでは、それ程優遇されることはないでしょう。そのことは諸君自身がよく認識しているでしょう。ただそうしたなかで諸君の真価を発揮するには何が重要でしょうか。それは諸君自らがこれから進むそれぞれの場において見出し、かつ実践していかなければならないでしょう。

それについても、最澄が「山家学生式」において示した名句、「径寸十枚、非是国宝、照千一隅、此則<sup>○</sup>国宝」が思い出されます。もっともこのなかの「照千一隅」は「照于一隅」の誤りではないかといわれるかもしれませんが。確かに以前には「照于一隅」として人口に膾炙されていまして、あるいは現在でも「一隅を照らす」という標語が社会の各層に広く受け入れられています。しかし叡山の経蔵に秘蔵されている最澄自筆の原本によれば「于」ではなくて「千」であること、従って「照千一隅」となるが、これは「照千里」と「守一隅」を簡略化した成語であることが明らかにされており、これらのことは先年、私の友人園田香融氏が岩波書店から発刊された日本思想大系の『最澄』で指摘したところで、その後これをめぐって相当激しい論争が展開されました。その論争では、既成観念とか思いこみというもののおそろしさなど多くのことを知らされましたが、それはおくとして、問題の「于」の字は「千」であることは間違いなく、「照千一

隅」は最澄が正しい意味を正しい字で書いたとする新説によれば、最澄の素意が非常によく理解されます。

「故古人言」として述べている前掲の文句は、最澄が天台宗の年分学生、つまり宗門の後継者の教育方針を定めたもの、その最初の書き出しの部分に出てくるのですが、『止観輔行』から斉の威王の逸話を引いたものです。威王のところへ隣国の魏王が訪問したとき（紀元前355年）、魏王は直径一寸もある大きな珠玉を十枚も持っており、それらは車十二乗の前後を照らす逸品で、これが自分の国の宝だと自慢した。これに対して威王は、自分には檀子などのすぐれた家臣がおり、彼らが国の一隅を守ってくれると楚・趙・燕などの国も攻めてこないし、また国内の治安を取締らせると泥棒や乞食も姿を消してしまう。彼らを將軍にすれば車十二乗の前後はおろか千里、すなわち国全体を照らす。これこそ自分の国の宝だと言った。そのため魏王は恥しそうに帰っていったという話であります。最澄はこの話から、車十二乗の前後を照らす径寸の珠玉などは国宝ではなく、一隅を守るものこそ千里を照らすものであって、これこそが国宝だと述べたのであります。そこで以前のように「照于一隅」として「一隅を照らす」と読めば、最澄の趣旨と全く反対の意味になるわけです。以上が新説＝園田説です。

このように最澄が強調した国宝、すなわち一隅を守る存在こそ千里を照らすものだということは、現代においても極めて重要な教えといえます。諸君はこれから様々な場において、その場を守る、いいかえればその場でなくてはならない存在になることが重要です。そのことがひいては社会全体に貢献することになり、社会全体において必要な人材となりうるのです。是非、卒業後はこのことを心に留めて活躍されることを願っております。

# 卒業生に贈る

— 私のねがい —

卒業生諸君、ご卒業おめでとう。

諸君が小学校に入学してから16年の長い間、心身ともに健全に、よく遊び、よく学び、ここに人生楽劇の序曲がおわらんとしている。そして今、諸君一人一人の新しい人生の幕が切り落され、生涯にわたって生き続ける創造的な道を求め、拓いていくべき岐路に立っていると言える。自ら考え、自ら行い、その責任を自ら背負っていくことになるのである。

諸君のおりたつ社会は、国の内外を問わず激動の情勢にある。学校教育の現場も、今日のあわただしい社会情勢から隔離されることはできない。校内暴力、犯罪、非行、まさに戦場のようにすら思われる。このような状況下で、教育の問題は今や国家的問題として、六・三・三制の見直しなどの学制そのものに目が向けられるようになるまでにはいたっている。

さて、最近私はある中学校の先生から、生徒の生活の様子や校内暴力の実態を聞き、そのあまりに物凄いのちに驚いた。このような生徒を教育する教師を、一体どのように養成すればよいのだろうか。家庭と学校が責任のなすりあいをして始まらない。このような教育現場をよく認識して、その根源をみつめなければならないことを痛感している。

以下に昨今私が心に念願していることを述べて諸君への餞の言葉としたい。

人間の環境を剥奪された野生児、中でも狼に育てられた二少女の話は、一方では作り話でないかと疑問をもたれ、真偽の決着はついていない。しかし次のことは私の友人が話してくれた事実である。赤ん坊と犬と一緒にして育てたところ、犬と同じことをするようになった。食べ物を横から取ろうとすると、犬と同じ声でうなったというのである。乳幼児期には犬の如くにも、また狼の如くにも育てることができるということを、諸君は何と考えられるか。狼少女の話は、一方では人間の順応の能力のすばらしさを意味し、狼の中で育てば狼の姿に育つのである。しかし一方、ヒトが

教育学部長 大澤 欽 治

人間になるためには、人間となる環境が絶対に必要であることを教えている。私達は人間の心、人間にしか育たない心育てなくてはならない。

— 親狼になるなかれ —

次に知識を豊富にもつことは人生を楽しくする。しかし、これを人間同志の心の調和にも役立てる能力、即ち知恵をあわせもたないことには、どうにもならない。人の人たるゆえんは、人類がhomo sapiensとしてもつ特有な理性的精神、知性にある。自己を顧み、至らない自己を自覚することは、同時に他の個性を尊ぶことに連なるであろう。ひとの教え、子供の個性、子供の話すことを受け入れる耳や目をもつことが、教師としての第一歩である。師弟同行ということばがある。先人は「まことの受容者は、最後には自分自ら産み出さねばならぬ」という。共に行い、喜び、悲しみ、共に成長するところに深い共感が生れるであろう。

— もの知りだけの先生になるなかれ —

まず子供の名前と顔を覚えよう。子供を知るには、子供の環境を知り、子どもの育ちを深く読みとらなくてはならない。特に母親の愛情のなかで育ったかどうか、そして子供の長所、美点を見出すことに努力しよう。かくすれば子供を見る目が開かれてくる。相手の欠点を見ようとする者の目は曇り、子供の心を読みとることはできにくい。子供の良心を見出すことによってそれはさらに太ってゆき、欠点は次第に瘦せていく。美点を読みとり、ほめることができれば、おのずから、叱らなければならない事柄がはっきりしてくる。子供の心を傷つけた時、それは生命の危険につながる行為であり、責任を果さなかった時ではないだろうか。

— ほめる愛情と叱る権威を惜しむなかれ —

以上、私の体験を反省して、率直に私のねがいとして述べた。何はともあれ、諸君は使命感を堅持して、夢と希望の実現に向って邁進され、二十一世紀を担う国民教育の中堅者に成長していかれんことを祈念する次第である。

## 卒業するとどうなる？

経済学部長 棚田良平

同じタイトルで、昨年の卒業生にも書かせてもらった。ところが、祝賀パーティで聞いてみたところ、それを読んでくれたのは、卒業生256人のうち、たった3人であった。今年はやめたいとゴネたが、編集委員の先生が困った顔をされるので、仕方なくまた同じことを書く。

さて、卒業したが諸君はこの先どうなるのだろう。かって卒業後民間会社に就職した経験をもつわたくしは、諸君の運命をつぎのように予言できる。

(1) 諸君は、これでもう、つまらない講義を — たとえば、わたくしの会社法などを聞かなくてもすむ。しかし、今度は職場で、たとえ尊敬できない上司であっても、その命令にいやおうなしに服従させられるであろう。職場での諸君は、しばしば、がまんできない人間とのつき合いを余儀なくされよう。そして諸君はその際、これまでなんとなく軽く見ていた大学の教育というもの、思いやりのあるかなりマシな人種であったことに気付くはずである。(あまり、自信がないが — )。

(2) とうとう「学割」がきかなくなる。映画館や通学定期券だけでなく、あらゆる面で「学生だから」というこれまでの情状酌量は失われるであろう。諸君の行為に対して、人並みの代償が要求されることになる。

(3) 大学時代には全然モテなかった諸君であるが、職場ではフレッシュ・マンとして異性からチャホヤされることであろう。ただし、その期間はつぎの新卒が入社してくるまでの1年間に限られる。

(4) 諸君のこれからの人生から、あの素晴らしい夏休み・冬休み・春休みは永遠に消え去ることになる。諸君は自由な時間の貴重さを痛感するであろう。そしておそらく、無為にすごした日々を嘆くに違いない。

しかし、もう遅い。

(5) 諸君は大学卒というレッテルを得る。そのため、実体とは無関係に「インテリ」と呼ばれることがあるだろう。縁談にほんの少しプラスになるかもしれない。それだけ。

(6) 大学では授業をサボっても、他に影響を与えることはなかった。しかし、職場ではグループの一員として行動することになり、欠勤や遅刻はグループに多大の迷惑を及ぼす。やがて、諸君はグループから疎外されることになるだろう。

(7) 職場では部長、課長、係長がそれぞれのテリトリーで全責任を負い、会議は長の命令伝達もしくは参考資料にすぎない。そこでは多数法は存在しない。なにかと自己主張が強く譲ることを知らない諸君は、きらわれ、うとまれ、確実に窓際族への道を歩む。いずれ諸君は、赤ちょうちんで酔いしれ、ただ不平不満をまき散らすだけの男になり下るだろう。

(8) 大学での上級生は生涯先輩であり、同級生は生涯同輩であり、下級生は生涯後輩である。しかし、職場では入社同期生や後から入社した者が諸君の上司となり、諸君を命令・支配することが少なくない。諸君はその屈辱にたえられるであろうか？

ともあれ、いまや、諸君はそれぞれ自らの運命を選択したのである。諸君は、大学において4年間(人によっては、もっと長く)、本来なれば勉学にあてらるべきエネルギーをかなり未使用のまま蓄電してきた。この巨大なエネルギーを放電すべきときがきたのである。一度きりの人生。思い切りやってみようではないか。再見!!

(おわり)

## 卒業生に贈る

富山大学理学部は第32回の学部卒業生と第5回の大学院研究科修士課程を社会へ送り出すことになりました。自然科学の最も基礎的な学問を修めた将来有望の諸君であります。先づは、心からおめでとくと申し上げます。

諸君が今旅立たうとする社会は、諸君のもっている可能性に大きな期待をかけています。社会は、進取の気性、固定観念にとらわれない柔軟な物の考え方、そして、自然科学の分野で特に若いうちに発揮される独創性を最も必要としています。

或心理学者の「独創と年齢」についての研究によれば、人間のもつ独創性が発揮されるのは自然科学の分野では30才代が中心であるとのこと。湯川、朝永、江崎等のノーベル物理学賞受賞の輝かしい業績はこれ等の人達の天分もさることながら若い時代の並々ならぬ努力が生んだインスピレーションによるものがあります。また、碁、将棋、オセロ等の知的競技の世界でも若い世代の活躍が目覚しく、コンピューターのプログラマーは30才を過ぎると急速に開発能力が衰退すると云われています。これ等は極端な例ですが、

理学部長 中川正之  
一人一人が持つ天分に差があってもその伸びは若い間にそのピークがあることを示しています。諸君がこれから進もうとする道は様々ですが、それぞれの職場において若い間に持てる天分を存分に発揮するように努力して欲しいものです。

大学ではそれぞれの専門分野の履修を通じて物の見方、考え方を学びました。特に最後の4年次の一年は短い期間ではありましたが、卒業研究をやることによって、物事を十分に理解するには如何に基礎的学力が重要であるかを知り、更に、小さな創意、工夫をするにさえも大きな努力が必要であることを知ったと思います。

諸君が社会に出てどのような仕事につこうとも、常に問題意識を持ち続け、物事を安易に鵜呑みにせず得ゆく迄徹底的に研究することが大切です。このような努力の蓄積が新しいアイデアを生み、仕事の大きな発展につながるものと考えます。

どうか20才代、30才代に人生の最重点を置く心構えで社会への新しい出発をして欲しいと思います。

## 卒業生の皆さんへ

工学部並びに工学研究科を卒業される皆さん、まことに御出立ありがとうございます。また長い間皆さんを支へ、励ましてこられたご両親やご家族の方々にも、心からお祝いを申し上げます。

さて、皆さんは十数年にも及ぶ学校生活を無事終えられて、間もなく初心も新たに、希望に燃えて実社会に巣立ってゆかれるわけでありませぬ。まことに御出立たい次第で、皆さんの今後のご発展とご多幸を、心から願ってやみませぬ。しかし皆さんを迎える社会は、月並な言い方ではありませぬが、まことに波風荒く多事多難であります。晴れの門出に水をさすような言い方で恐縮ですが、これからの皆さんを待ち受けているものは、おそらくは様々な形の挫折と逆境であらうと申しても過言ではないでしょう。やる気のない人は論外として、自分なりに懸命に努力していても、事が思い通りに運ぶことは、まず少いと言わなければなりませ

工学部長 位崎敏男  
ん。なにかしら、どこかで必ず壁にあたる。残念ながら、これが社会生活の現実であります。

しかしまた、逆の観点からみますと、そうした挫折や逆境があつてこそ人間は鍛えられ、それを乗り越える所に人間の生長があるとも言えるわけでありませぬ。要は壁をさけて易きにつくか、あるいは苦しくとも壁を乗り越えるための手だてを尽すか。そこが問題であります。またそうした逆境で、皆さんを支へてくれるものは、一体なんでしょうか。もちろん人夫々で、簡単に答の出る問題ではありませんが、しかし矢張り一番大切なものは、人生や仕事に対する皆さんの夢であり、志ではないかと私は思います。「青年よ大志をいだけ」などと言いますと、いかにも時代めいてきますが、夢や志のない所に、生甲斐や充実感もまた生まれぬことは確かであらうかと思ひます。いさゝか釈迦に説法とはなりませぬが、これから社会に出られる皆さん

んに、困難を恐れず、これに果敢に挑戦する気力と活力と、そしてそれを支へる大きな志を是非期待したいものと思います。

所で、久しく低迷を続けてきた日本経済も、ようやく明るさが見え始めたと言われてはおりますが、しかし世状は依然として昏迷と緊張を深めております。内には行政改革や財政再建、外には世界不況と貿易摩擦等々の重苦しい難問が山積しておりますし、企業は技術革新と体質改善のはげしい嵐にあえいでおります。まことに多難な時代であります。しかしこれも技術を核とした、新しい社会や産業の構造を模索するため

の、さげられない試練であるとも言えます。したがってこの昏迷の時代も、見方をかえれば、新しい時代を目覚して、果敢に挑戦する意欲ある人達には、多くの活躍の場と可能性を与へてくれる時代とも言えるでしょう。このような意味では、多難ではあるが、多くの可能性を含んだこの時代に、技術者としてのスタートを切られる皆さんは、ある面ではまことに仕合せであるとも言えるかも知れません。若い柔軟な頭脳を思いっきりぶつけて、自分を試して載きたいものと思います。皆さんの健闘を心から期待しております。

## 卒 業 生 に 望 む

経営短期大学の卒業生の皆さん、卒業おめでとございます。皆さんは、その大部分が勤労者・社会人で、職場での8時間の労働を終え、あるいは就職してない人でも何らかの実生活をすませて、夜は大学にきて約3時間の勉学にはげむという生活を3年間続けてこられたわけですから、その労苦は非常に大きかったことと思います。労働の疲れをのりこえ、遊びたい休みたい誘惑にうちかって卒業をかちとられたことに敬意を表したいと思います。この働きながら学ぶという試練をのりこえたということは、皆さんのこれからの人生に必ず貴重な経験として活かされるでしょう。

さて、皆さんは、夜に大学で勉強する負担がなくなって、仕事に専念でき、好きなこともやれると思っ

てほっとしていることでしょう。そこで、皆さんの卒業に際して、二つのことをのべておきたいと思います。第一は、卒業は3年間の課程の修了であって、実生活での自立した勉学への旅立ちであるということです。卒業により、学ぶことを他人から強制されることはなくなりますが、学び続けるか否かは人間の一生に大きな影響を与えます。経営短期大学部は、社会科学に関する勤労者教育機関ですから、労働と学問を統一的に行うことを教育理念としています。学問は、働くための知識や技術を養い、労働の目的を真理に近づけるために行うものであり、労働は学問と結びつけることによりその価値は高められる。それゆえ、学問を現実との関係で考え、労働を学問に近づけることが重要と考えます。特に、社会科学は、社会現象を対象とするものですから、真の学習は仕事や社会生活の中にある

経営短期大学部主事 松 嶋 道 夫

といえます。大学で教えることは、その考え方や方法が中心ですから、職場や社会生活の場では、自らの判断で応用していくしかありません。卒業はそのような力が皆さんにあることを認めるわけですが、それは同時に、自立への期待がこめられています。科学技術の進歩はめざましく、社会・経済はたえず変化し発展していますから、学ぶことを忘れたら時代におくれてしまうでしょう。それゆえ、卒業後も学び続ける意欲を失わないでほしい。

第二に、自分の社会的存在について目をむけることです。自分の仕事や生活のことさえよければよいということではなく、自分の生き方を社会の人々との関係で考えることが重要であると思います。皆さんは、現代社会の複雑な政治や経済のしくみの中に生きているのですから、自分だけ他人とかかわりなしに生きることは不可能です。自分は関係ないと思っ

らの社会の担い手ですから、このような問題についても関心をもち、自分の生活と結びつけて考えることが重要であると思います。

卒業ということは、自立して実践的に学ぶ責任、自分のことだけでなく人々のくらしや平和の問題につい

ても自ら対処していく社会的責任が生じることを意味します。皆さんが経営短期大学部で学んだことを基礎に、自立した社会人として一層成長されることを期待するものです。

## □□□ 昭和58年度停年退職者 □□□

教育学部	文部教官	教授	田中久雄
"	"	"	鶴木利雄
工学部	"	"	四谷平治
"	"	"	広田実

工学部	文部教官	教授	中川孝之
"	"	講師	南立作
教養部	"	教授	岩田弘

## 停年退職に当って

— 体育教官の立場から —

昭和23年4月に富山師範学校に奉職してこの方36年間、この五福キャンパスに通ったことになる。当時は今の人文学部の所に、空襲で焼け残った兵舎があった。富山三十五連隊の第一中隊の兵舎のみで、暗くて狭い二階建の頑丈な宿舎の中で授業したことが、昨日のように思い出される。

戦時中は、運動場は勿論、校地の空いた所は総て耕されて畑になったもので、疲弊した戦後の国家予算では、体育館は無論、運動場の建設費まで来なかった。仕方なく学生たちの勤労奉仕で今の経済学部のある所に400mのトラックを作り、授業やクラブ活動を行った。雪中演習場までの練兵をする砂利っ原で、石ころをかき集め埋め込んだり、溝を埋めて均したりして、上り下りの馬の背のような走路を作った。それが経済学部の新設で今の理学部の所に移ったのを手始めに、理学棟建設・学生会館設立・薬学部移転・図書館建設とそのたびごとに5度も場所を変えられ、とうとうキャンパス後方の現在地に移された。

2万坪の連隊跡は、教育学部の敷地として構想が立てられ、中に同居していた附属幼・小・中学校を五艘の現在地に移転した程なのに、経済学部・大学本部・文理学部・薬学部と入ってきて、密集・密接の大学になってしまった。移転問題も出ないで、ただ運動場を押し出すばかりの発展性のない、計画性のない大学で

教育学部教授 田中久雄  
は情ない。

学園の活気は構成員の活力にあり、学生・教官・職員の活力は体力の如何による。体力は単なる観念でない。運動・活動することによって確かめられ、作られ、高められるものである。そのためには運動する場所を用意することが第一で、このエリアサービスのための大学全体の強力な機構が必要である。その施策に基づいて、運動する場・体育館の確保が先決である。

何を・どのようにやるかのプログラムサービスの面については、専門家の体育教官が当るべきであり、学生自身のプログラムは体育講義から発展すべきであり、単なる教養講座的なものや、趣味だけに終るようなものでは、価値が低いと云えよう。

先に「富山県スポーツ百年史（高橋勝正編）」をひもといていたら、小生の子どもの時の記録を見つけた。昭和10・11・12年の県大会、12年第二回北陸三県対抗陸上競技大会に200m低障害に何れも優勝または新記録であった（旧姓大畑、よい記録でない）。スプリンターだったのに障害走に廻されたのは、当時心臓を患っていたからであったことを思い出した。脚気を病んでいたのに運動を続けた為に心臓がおかしくなり、結滞までするようになった。結滞とは脈膊が一時止まり、あと激しく拍つもので、眠っている時に起るので誰も判らない。全身に何とも云えぬ違和感・虚脱

感・圧迫感を伴い、これで終りかと思うことが何回もあった。当時は「人生50年」と云われる時代で、これでは永らく生きれないだろうと思っていた。

母は46才で亡くなっていたが、父は84才まで生きた。2人合すると130才となり、遺伝的に考えるとその半分の65才が丁度今の年であることから、これからの私の人生は一年一年儲けものとなる。

それにしても、体育とは「からだ」をよくするものであるべきなのに「勝つ」ためのスポーツをやっている間にか体が蝕まれていたとはどうしたことか。

体育の手段としてのスポーツを「行う態度」如何が、体育となったり反体育となったりする例で、誰もが気をつけねばならないことである。面白い・挑戦する・克服するなど、感性から出発するスポーツを行うときの知性がどうであるかの感性と知性とのかかわり合いの問題である。

このように来し方・行き方を思うと問題ばかり頭に浮び、今停年でやめるんだとの実感が湧かない。よき大学・よき学生になるように、後に続く人に托し、信じています。

## 退 官 寸 感

いよいよ、昭和59年4月に退官することになった。昭和13年3月に教員になったので、それから実に46年という永い間、約半世紀にわたりしている。過ぎ去った昔は全く夢のようで、教員になったのが昨日のこのように思われてならない。46年間もまあ勤めさせてもらったものだと、自分ながら驚いている次第である。永い間、種々お世話になり心から感謝申し上げたい。

私は、昭和13年3月、富山県師範学校を卒業後、小学校・高等女学校・中学校・高等学校・大学というように、転勤するたびに校種の違った学校に勤務した。即ち、訓導・教諭・助教授・教授・校長というように身分の変動があったが、教育者である私が、これらの種々の違った学校、小・中・高・大として一貫した教育体験を得ることができたことは、大へん幸であったと考えている。今度4月退職後、幼稚園長になってほしいという要請もあるので、未経験の幼稚園にも勤務できるのではないか。

昨年12月2日、教育実習運営協議会が、教育学部で開催されたが、その席上、教育実習協力校の校長か

教育学部教授 鶴 木 利 雄  
ら、「教育実習生の板書の字が下手で困る。もっとうまくなれないか。」という発言があった。教育学部の書写書道教育をより充実してほしいという要望であるようである。書写書道担当者として全く汗顔の至りであった。退官を前にして、今更ながら指導の充分でなかったことは深く反省している。

昨年12月27日、第二次中曾根内閣が発足した。中曾根内閣は、教育改革を施政の四本柱の1つとして打ち出し、教育改革に対して意気込みの強いところをみせている。臨時教育調査会（仮称）を設けて、学校制度、偏差値依存、共通第一次試験の改革、また、情操教育、道徳教育の充実、教員の養成、採用、教員の資質の向上など、種々な問題について改革の構想をもっているようである。教員免許法の改正、教育実習の期間の延長など、教育学部の責務と使命もますます重大になってくると考えられる。新しい21世紀夜明けを迎えようとしている現在、教育の原点にたかえり、大きな課題に向って前進の一途をつづけなければならぬ。富山大学のますますのご発展を祈って止まない。

## 定年退官に当っての所感

未だ来ぬ先のことを考えるのは長く見えるのに、過ぎ去った事を振り返るのはほんとうに短かい気がしてならない。大学を卒業して直ちに旧浜松工専（現静岡大学工学部）講師となり教職に身を投じて41年6

工学部教授 四 谷 平 治  
か月もの間この道一筋に働かせて載いたことは考えてみれば長いようであるが過ぎ去った今日からみると何だか一瞬のようにも思えてならない、その間まあまあ健康に恵まれて教育と研究に終始して働いてい



るうちに、まだまだと思っていた定年退官がもうすぐ目の前にやってきていたというのが実感である。こういうことが言えるということが天の恵みに浴したというのかなと思ひ有難いことだと考えるのである。平穩無事に暮らしてきたということが人間の幸せにつながるものであろうか。

そうは言っても40年余りの教師生活の1コマ1コマは精一ばいに生きてきたつもりであって決して平坦な道ばかりではなかった。大づかみに言えば何といっても大太平洋戦争という日本の冒した失策はその後の敗戦によってわれわれの学園生活にもものしかゝって大きくゆすぶられたと言うことが出来よう。期間中に2回の大きな波のうねりをかむった時期があったように思う。1つは戦時中に学徒動員と称して学生が学園を離れて戦争の前線に又は軍需工場に配属されて生産の戦列に立たされた時期である。昭和18年から20年にかけてのことである。私は当時旧長野工専(現信州大学)に勤務していたのであるが学徒動員によって川崎市にあるKK東芝の工場に学生と一緒に派遣されて電波兵器の生産に従事したものである。昼は工場で働らき夜は東京の大森の会社寮において学生と寝食を共にしながら毎晩2時間づつ疲れた身体で専門の電気工学の講義をしたことが思い出される。その後工場は爆撃でやられてさんざんな目にあつた。いわゆる軍国主義の時代であつて学生は勉強することが殆んど出来なくて学園生活はその本来の機能を停止してしまつたのであつた。これが戦時中2、3年続いたのである。もう1つは昭和43年から数年間に亘つた大学紛争の勃発であつて今でも記憶に生々しい、わが富山大学においてもあの数年間は苦難の時期であつた。一部の学生から提起される要求は極めてラジカルであつてわれわれはそれに直ちに対応出来るものでは到底なかつたのである。またその解決の方法論においても極端なものであつた。ストライキ(授業放棄)が相継いで起こり全学大衆団交を行った事とか、大学本部が一部学生に占拠されたとかいろいろあつて今思い出しても記憶に生々しい。当時は大学教官はこのような事態に未経験なこ

とばかりであつてこれに対して適確な対応を欠き徒に解決を長引かせた点もあつたように思う。学内に対策委員会を作つて連日長時間に亘つて論議をしたものである。何にしても大学本来の任務である教育と研究の機能が失われたことは事実であつて今日から振り返つてみれば空虚な失望感が強いと言わざるを得ない。大学紛争は日本の多くの大学で更に世界各国においても勃発して一時期はフィーバのようになったが時間がたつにつれて疑問と反省が現われて次第に平静を取り戻すようになったのである。

何れにもこの2つのわが国の教育史上にも特筆されるであろう時期を体験した。1つは極端な右の偏りであり、もう1つは強い左への指向であつて本来は教育と研究の場である大学の機能が失われていたことはこの両者に共通することで疑り余地がない所である。まあ雨降つて地固まるということもあるから苦難の体験を経て試行錯誤によって大学のあるべき姿を模索して行く所に大学の意義があるのだと自からを慰めてもみるがこれは言い逃れであらうか。

私は最近学生部長を勤めさせて戴いている期間中にも何回かに亘つて一部の学生諸君ときびしい対応をしたが、話し合つてみると、どの学生も純真で一途な心を持っているのでこれは良いことではあるが1つの物を見るのにあらゆる角度から多面的に見るようになってくれたら良いのにとつくづく思うのであつた。物の本質を究めるには一方からだけ見てはいけなないのでいろんな方向からアプローチして始めて本質に迫ることが出来るのでなからうか。

筆を走らせているうちに次第に標題の定年退官に當つての所感にふさわしくないような所へ行きそうになつてしまつたがこの他に研究の苦労話や講義のこと学生との交流、課外のスポーツなどが走馬灯のように頭をかすめて行くのである。これらは別の機会にゆづることにして何はともあれ本学において長い間思い出多い勤務をさせて戴いたことに対して私をとりまく総べての方々、総べての事物と環境に対して心からのお礼を申し上げさせて戴きたい気持で一ばいである。

## 旅 の 人

昭和47年10月に着任して早や11年半の歳月が過ぎました。今また富山を去るに當つて、旅の人とい

工学部教授 広田実  
う言葉が実感となつて身に沁みて参ります。

11年前、大阪発富山行の特急雷鳥に乗り、窓外に

移りゆく北陸の風景に胸おどらせながら、期待に満ちた若人の心境で着任の途につきました。富山といえば薬売りか蜚気楼ぐらゐの知識しかなく、福井も石川も富山も全く区別なく、一律に北陸というイメージでしか理解していませんでした。

最初に高岡駅に降り立ったときから、私の富山での生活が始まりました。まず駅のホームで耳にした高岡弁が大変珍らしく、遠くへ来たという感じがしたものです。ところが、年が経つにつれて、あの独得なアクセントの高岡弁にも不思議に違和感がなくなり、同じ北陸でも、富山と石川と福井では県民性に微妙な違いがあることも、うすうすながら、わかるような気がして参りました。

この間、学生に誘われて立山を縦走したり、テニスコートで汗を流したり、あるいはまた、教職員の皆様と温交会の一泊旅行に出掛けて徹夜で碁を囲んだり等々、楽しいことばかりでした。また、厳しい立山連峰の雄姿や、四季折々の富山湾や、木立ちに囲まれた昔ながらの散居村のたたずまい等、富山ならではの自然の風物詩もまた深い印象となって私の心の中に残りま

した。

人生60有余年，“月日は百代の過客にして行きかゝる年もまた旅人なり……”，中学生のとき習った奥の細道の冒頭の一句がふと頭に浮かびました。思えば、この11年半は、公私ともに富山の皆様の温い人情に育まれて、全く一瞬のうちに過ぎ去った夢のような年月でした。短い在任期間ではありましたが、私にとっては忘れることのできない人生のひとこまとなりました。富山を離れてもこの夢を大切にしたいと思いません。

富山にも北陸新幹線が走り、ジェット機が飛来する時代となりました。テクノポリス構想の実現も間近かで新しい富山の夜明けが始まろうとしています。懸案になっていた工学部の五福移転も始まり、大学にも新しい息吹きが感じられる今日この頃です。

何時までも今の富山であってほしいと願う一方、北陸の富山から日本の富山、いや、世界に羽ばたく富山へと発展してもらいたいと願う心も切なるものがあります。

富山に限らない愛着をもつ旅の人の願いであります。

## 大志と勇気をもって

私は戦前の学校教育を受け、卒業後名大工学部航空学教室設立の折助手として3年余り、相次いで海軍士官として太平洋戦争のとき横須賀海軍航空隊において、その頃先端の電波探知機の整備を担当、戦後新設の高岡工専、新制富大工学部勤務という変遷を経て今日に経った。これらの社会環境が変る毎に、不思議に、新設（創設）という基礎確立の務めを果すべき部局に配置された。この間、最も苦しかった時期は、戦後10年間の高岡工専と富大工学部勤務のときである。設立当時は設備が無く、その購入費用も皆無に等しかつたので、兵器廠より廃物兵器をゆずり受け、兵器の中より必要部品を分解収集し、教育用実験装置に改造し使用した思い出がある。私は当時まだ若く、環境が変る毎に与えられた仕事は天命であると考え、その意義と責任とを自覚し、努力と実行に心掛けていた。この事が積み重なり今日まで苦難に出合う毎に私に勇気が与えられたと思っている。

ごく最近、独創性、創造性という言葉が種々の分野にわたり新聞や、テレビ等で報道されている。過去、

工学部教授 中川孝之<sup>\*</sup>  
理化学研究所長であり、又私の母校の校長大河内正敏博士は、理化学研究所員や、我々学生に対し、又各種報道機関を通じて“科学する精神”の涵養について説得された。その意図は、日本近代化の為には独創性ある発見、発明なくして欧米に伍してゆくことができないということ、欧米各国が保有している天然資源に比べて日本は極めてその資源が乏しい事を認識しておられたからであろう。当時のこの言葉は現代の独創性、創造性をもつ研究という表現にほかならないと思う。

戦後日本の工業生産技術の進歩は、工業製品の輸出急増をもたらした。貿易摩擦にまで発展して来たと考えられる。さらに詳細に考えると、欧米の独創性を重視した研究に対し、日本では多量生産を目的とし、その研究内容は改良開発、既存技術の組合わせを基礎としている点が現状で、欧米のそれとは異なる点であると言われている。それぞれの特徴ある研究は互に協調し合い、人類が文化的生活を享受するためには、この協調性が重要であると考えられるが、民族間の経済問題は民族感情の問題に発展し、さらに政治問題化され、

本来なら平和な世界となすべきはずの努力が、常に問題を生ずるようになるのは何故であろうか。

戦後、急速に発展した自動制御部門における研究は、省力化、多量生産技術に応用され、特色ある日本の技術開発の研究と相まって、いまやコンピュータの恩恵を想像以上に享受している時代となった。このような状況の中で、いまこそ経済問題に端を発し、民族間感情を悪化させないような既存の概念と異なる独創性のある仕事に従事し、その望みを達成させるための勇気ある努力が大切と考える。

私自身は敗戦後、国の再興を目的として、故郷で社会環境の推移に応じ、自主性のある仕事を行なうことに努めたが、目的達成に時間がかかり過ぎたばかりでなく、まだまだ不十分であると反省している。間もなく工学部が富山へ移転し、富山大学が名実ともに総合大学となる。若い学生諸君、私が夢見たが果し得なかった事の多かった事を思うとき、それぞれの分野に大志をいただき、その実現に勇気をもってあたられご活躍されるようお祈りする。

＊ 東京物理学校（現東京理科大学）

## 定 年 を 迎 え て

退職に当り投稿との事ですが、特に書くこともないようですが、考えて見ますと奉職致しまして三十年余りになります。つい四、五年前の様な気がします。

長い年月を諸先生や事務関係の方々又学生諸君にも御迷惑をかけ、又御指導を賜り今日に到った事を心から感謝と共に厚く御礼申し上げます。

古い言葉に予は仕事に追はれずに、仕事を追ひかけ、常に仕事を完全に統御して、仕事の奴隷にならないやうに努めている。凡そ人間は、自分の仕事を完全に

工学部講師 南 立 作

統御している自信があれば、気分も自然に引立て来るものであるが、私も余生幾何が送られるか分からないが、どんな事でも探し求めて進んでやることだと心がけるつもりです。人間は一にも仕事、二にも仕事であるような気がす只今の心境です。

工学部移転準備も進みつゝあり、全学部が富山に統合され、高い、深い研究と立派な勉学の場の学園となります様望みます。

## 感 謝 と 後 悔

劣等感に虐まれ終始戸惑い勝の私を三十余年変らぬ温情で見守り下され必要な時扶掖善導の労を惜まれなかった先輩同学の諸先生及職員各位に先ず厚くお礼申し上げます。特に健康には自信のあった頃の私が昨年六月慮らざるにうとましき病名の宣告を受け一ヶ月半入院し病院の行届いた看護により幸再生するを得ました際、皆々様の御丁寧なお見舞と鼓舞激励を賜った御恩は終生忘れ得ない思出です。三十年、その間に世界情勢、国内情勢と共に学内でもいろいろのことがありました。私が来た時、連隊跡の敷地に教育学部が兵舎を襲用していました。古い建物で、大建築林立する現在の壮観に比較して多少の感情を禁じ得ません。

如何なる縁か哲学倫理美学関係の知己に恵まれながらその方面の素質が白痴的である私が数学を選んだのは誰の目にも冒険でした。しかし私は他の方向へ進ん

教養部教授 岩 田 弘

だら今以上の不手際を露呈するであろうと考えることによってそのことは後悔しないことにしています。後悔はむしろ数学を衣食の道として選びながらそのはじめに心構えがなかったことにあります。おそくとも原富先生から「数学の勉強には骨を削り身を細らす努力を厭ってはならない」という意味のお便りを戴いた時乾坤一擲の決意が私には必要だったのです。しかし「数学というものがそんな大変なものなら私は道を過つたのだ」等と冗談に紛して真剣に考えませんでした。恩師であり上司であった練達の数学者先生に対する不遜な態度はいくら責められても忘れ得るものでありません。唯冷たい演繹の積上げに過ぎなくても仕方がないと思っていたこの学問が実に美しい定理を多く包蔵していることは、少年時代から美にあこがれる傾向が強いことを何回となく指摘されていた私には幸運だった

と思います。美しい定理はその証明を追跡する努力を忘れて陶然と見惚れていたことを思い出します。「数学は科学の女王で整数論は数学の女王であろう」という K. F. Gauss の言葉程私が無条件に是認した言葉は少ないのです。ある友人が指摘した如く「ロゴスの殿堂である数学をパトスの立場から眺めたのでは」成功する筈がありません。しかし才能に恵まれず、努力の意志の弱かった私にはやむを得ぬ事と諦めています。

私が実力不足の申訳をする時いつも「太平洋戦争勃発直後の昭和十六年十二月末第一回繰上卒業という兵

馬倥傯の時勢、勉強等したくとも……………」等とうそぶいているのですが理由にならぬ事は実は私もうすうす感じているのです。人間、年令のみで他人の軽蔑をかわそうとする事程衰れを感じさせる事は少ない筈ですがそれ以外何の取柄なき私を終始隔てなく談笑の中に入れて下さった為私は結論として劣等感を跳ねのけて「このキャンパスでの生活は「面白かった」「楽しかった」と言わして貰いましょう。有難う御座いました御健康をお祈りしつつ。

## ===== 新任 教 官 =====

○松原 勇 助手 (理学部)

(計算機センター勤務) 59.1.1

昭58.3 電気通信大学大学院電気通信学研究科

物理工学専攻修士課程修了

担当：構造化学 (情報科学)

## 富 山 大 学 へ 来 て



まず、先生方、学生さんの研究熱心なことに感心しました。特に計算機センターに来る学生さんが真面目なことに驚ろいております。そのような学生さんと一緒にいると、ついまだ学生の気分で話し込んでしまい当初はよく注意されました。

真理を求めて計算に没頭する姿は、すばらしいものだと思います。そのような人々のために私のような者でも、何らかの協力ができるだけで喜んでおりましたが、思いもかけず助手として採用になり、はたして自分で勤まるかどうか不安で一杯です。

さて、履歴書風に自己紹介させていただきます。  
名前 松原 勇 昭和34年3月27日 富山県城端町に生まれ、のんびりと育ち、いまだ独身貴族。  
中一・天体の神秘に魅せられて、天文観測に熱中。  
中二・模型エンジンの力強さに取りつかれる。  
中三・電話級アマチュア無線免許を取るなど、電気工作に興味を持ち、その後いろんな物を自作する。  
昭和49年砺波高校理数科に入学、物理部に入る。  
高一・物理部で、卒研のように毎日研究をする。

理学部助手 松原 勇

高二・実習で初めて計算機を習い、その威力に驚く。  
高三・顧問の先生から、物理学の魅力を教えてもらい物理学者を夢見る。(当然、夢だけで終る。)  
昭和52年早稲田大学理工工学部に入学するが、計算機と物理学の勉強がやりたかったのと、金銭的に苦しかったので、すぐ退学し国立の電気通信大学に入学する。  
大一・将棋部に入り、毎日将棋を指す。(自称三段)  
大二・初めて計算機を授業で習い興味を深める。  
大三・マイコンが世の中に登場し、熱中し始める。  
・突然旅に目ざめて、九州や小豆島を一周する。  
大四・初恋に迷い、山陰や東北へ瞑想の旅に出る。  
・物理を中心に勉強し、卒研と修論は原子のエネルギーの精密計算をすることに決める。  
昭和56年電気通信大学大学院へ進学、情報処理センターの研究室に入り本格的に計算機の勉強を始める。  
院一・初恋に破れ、北海道へ約一ヶ月傷心の旅をする。  
・その後半年間やけ酒を飲み続け、ダウンする。  
院二・物理学に未練はあったが、計算機の方を専門にしようと決め、毎日計算機に向かう。  
・富山大学に情報処理センターの設置計画があることを知り、それにぜひ参加したいと思い問い合わせる。

昭和58年4月 本学計算機センター 技術補佐員  
昭和59年1月 本学理学部助手 計算機センター勤務 以上  
私の場合、計算機を通して大学の研究・教育に協力

するのが仕事です。何分にも、まだ若く経験も浅いので皆様の御指導・御鞭撻の程、宜しくお願い致します。  
計算機センターにおりますので、マイコンや計算等のことで御質問がございましたら、お申し付け下さい。

## 公開講座委員会報告

公開講座委員会委員長(教養部教授) 藤井 昭二

公開講座委員会のもよりについて、学園ニュース第41号(58.3.17)でお知らせしまして、はや一年たとうとしています。全学の教官・職員のご協力によって、昭和58年度下記の公開講座を無事に終わることができ、ありがとうございました。

「健康・スポーツ教室」が8月21日から9月4日まで、硬式テニスコース、体操コース、ジョギングコースにわかれて五福のキャンパスで行なわれました。

また「現代を考える」が10月11日から12月1日まで教養部201番教室で15回、「現代のコミュニケーション」が高岡の工学部会場で吉田順作工学部委員の大変なお骨おりで10月12日から11月23日まで20回開かれました。

その他、教育学部で夏に「バドミントン・テニス教室」が行なわれ、教養部で秋に「生きる」が行なわれました。

58年度の一年間を反省しますと沢山の問題がありました。次のように要約されます。1) 受講者の募集問題、2) テーマのきめ方、3) 事務官の超勤の問題、4) 立看板の問題、5) オーガナイザーの役目。

ここで1)と2)の問題について簡単にのべます。

### 1) 受講者の募集

いつも教養部で行なっているように、教育委員会や大きな企業に文書やポスターを送り報道機関に出向いてお願いしたので、一応することはして、立派な先生が講義して下さるので教養部で行ったように50人前後の受講生があるものと「武士の商法」をきめこんでいたところ、しめきり一週間前になっても一桁の受講者しか、富山も高岡会場にも集まらないことがわかりました。理学部や文学部の講義ですと学生が数人というのは決して珍らしくありませんが、沢山の先生に夜おそくまで残って講義していただくのに余りすくなくないか、受講生もあまりすくなく億劫になって帰

てしまう恐れもあるので、どうしても50人前後人を集めないといけないというので、あわてて再募集にかりました。私は生来人の名前を憶えるのが下手で、新聞社や放送局までいってまごまごしていますと、大抵どなたか小生達の顔を憶えて下さっていて親切にしてくださいました。中にはテーマがはっきりして大上段に構えているので、それでも大学はしきいが高いのに、なお高くなる。もつとろんなテーマがあった方が集まり安いのではないかという示唆を与えて下さった方もいます。結局、教養部や教育学部、人文学部の公開講座に出席された方々の住所録や北日本新聞の「ひととき」の会員達の住所録を手に入れ事務局の方々にダイレクトメールを出して貰って一講座約50人の受講生を獲得することができました。ポスターや新聞やテレビでどの位の効果があるのだろうか、口こみやダイレクトメールの威力を認めざるを得ません。

### 2) テーマのきめ方

公開講座委員会で、講師にあまり負担をかけないという暗黙の了解がある(何か新しいことをやる時、ある程度勉強しないとできっこないが)。また全学の委員会なのでなるべく全学部から、できたら均等の講師をお願いしたいという考えもある。しかし、この2つにとらわれていると折角よい企画がうかんでも動きがとれなくなりご破算になる可能性がでてくる。それでもテーマがしぼられるのが尚狭くなってしまふ。数人の方が企画し学部にとらわれないでやってくるとかなり広くテーマもとれ、動きやすいものができるであろう。角をためて牛を殺す形にしないよう注意する必要がある。

昭和59年度公開講座は吉田順作委員のオーガナイザーで「現代史に学ぶ」(仮題)等が予定されている。また委員が講師を委嘱にうかがうことがあると思いますがその時はよろしく願ひいたします。

公開講座委員会の目的に「本学の教育・研究を広く社会に開放し、地域社会の文化向上に資すること」と

ある。この広くをどのように解釈するのか、実際放送講座を行なっている大学もある。大学図書館の一般利用や、近く全国放送される放送大学との関係や生涯教

育とどのようにかかわり合うのか、そこまで議論するのか、今一つの話題になっている。

### 昭和58年度富山大学公開講座

—健康・スポーツ教室—

開設コース名	募集人員	受講対象者	備考
硬式テニスコース	40名	初めてラケットを持つ婦人初心者	テニスシューズとボール2コ持参、ラケットは貸出可
体操コース	20名	中・高年齢の男女	日頃運動をする機会のない65才までの中高齢者
ジョギングコース	20名	一般男女	

(日程・開講時間)……○印は2時間, ⊙印は4時間の講座となります。

コース	8/21(日)	22(月)	23(火)	24(水)	25(木)	26(金)	27(土)	28(日)	29(月)	30(火)	31(水)	9/1(木)	2(金)	3(土)	4(日)	計
硬式テニスコース	○	⊙	○					○		○	○			○	⊙	20時間
体操コース	○		○	○		○		○		○		○		○	⊙	20時間
ジョギングコース	⊙	○		○		○			○		○		○		⊙	20時間

(講師及び講座内容)

硬式テニスコース

教育学部助教授 山下三郎, 教養部助教授 北村潔和  
体力診断及び体力増進法, ストロボ等による技術診断, 実技では各種ストローク, サブ, ボレー, スマッシュ等の基礎技術とゲームの進め方

体操

教育学部教授 河野信弘  
関節の動きをよくする体操, 内臓の動きをよくする体操, 体力をつけるための体操, 姿勢を正しくする体操, 自分でできるマッサージ法など健康生活を保つために体操を利用する方法

ジョギング

教育学部教授 山地啓司, 教養部助教授 福田明夫  
ウォーミングアップの方法, トレーニング方法とスケジュールの作り方, 走り方, コースの選定法, シューズの選び方, レースへの参加と準備の進め方など

### —現代を考える—

回数	期日	所属・職名	氏名	課題
1	10月11日(火)	人文学部教授	本田 弘	現代における価値観の多様性について
2	13日(木)	(同上)	(同上)	(同上)
3	18日(火)	経済学部助教授	飯田 剛史	現代社会と宗教
4	20日(木)	(同上)	(同上)	(同上)
5	25日(火)	経営短期大学部助教授	芳賀 健一	発展途上国の金融危機
6	27日(木)	教育学部助教授	山本 都久	現代社会の人間関係—「援助行動」を中心にして—
7	11月1日(火)	経営短期大学部助教授	下崎千代子	オフィスオートメーションの現状と課題
8	8日(火)	工学部教授	吉田 順作	磁気記録工学の動向
9	10日(木)	教養部教授	河野 昭一	自然保護の問題
10	15日(火)	(同上)	(同上)	(同上)
11	17日(木)	理学部教授	高木光司郎	レーザーについて
12	22日(火)	富山大学長	柳田 友道	バイオテクノロジーの発展
13	24日(木)	トリテウム科学センター教授	渡辺 国昭	核融合とトリテウム
14	29日(火)	教育学部教授	中川 眸	健康と栄養—過去から現在へ—
15	12月1日(日)	(同上)	(同上)	(同上)

－現代のコミュニケーション－

回数	期 日	所属・職名	氏 名	課 題
1	10月12日(水)	人文学部教授	和崎 洋一	コミュニケーションと人類文化
2	14日(金)	人文学部助教授	鈴木 敏昭	言語とコミュニケーション
3	17日(月)	工学部教授	四谷 平治	コミュニケーションにおける情報
4	19日(水)	人文学部助教授	藤本 幸夫	世界の文字と言語
5	21日(金)	理学部教授	広岡 公夫	地殻構造にみる古代とのコミュニケーション
6	24日(月)	工学部教授	吉田 順作	社会構造の変革に伴うコミュニケーション技術の発展とそのインパクト
7	26日(水)	経済学部助教授	武井 勲	経済活動とコミュニケーション
8	28日(金)	経営短期大学部助教授	篠原 巖	行政と国民とのコミュニケーション
9	31日(月)	理学部教授	水谷 義彦	自然水との対話におけるトリチウムなど同位元素の利用
10	11月2日(水)	工学部助教授	島崎長一郎	化学工学における情報とコミュニケーション
11	4日(金)	工学部教授	若林嘉一郎	変ぼうしつつある化学工業(化学工学から市民へのコミュニケーション)
12	7日(月)	教養部助教授	梅村智恵子	言外の意味とコミュニケーション
13	9日(水)	教育学部助教授	宮崎 州弘	教育におけるコミュニケーション
14	11日(金)	保健管理センター教授	中村 剛	心霊とのコミュニケーション
15	14日(月)	工学部非常勤講師	美細津 博	コミュニケーション技術の動向
16	16日(水)	工学部教授	八木 寛	生体電子工学とコミュニケーション
17	18日(金)	"	風巻 恒司	エネルギーと文明
18	21日(月)	"	多々 静夫	金属とコミュニケーション
19	23日(水)	工学部助教授	松田 秀雄	最近のコンピューター
20	"	"	米田 政明	コンピューターとの対話

昭和58年度富山大学教育学部公開講座

－バドミントン・テニス教室－

区分	月 日	曜	講 師	備 考
1日目	8月8日	月	バドミントンコース 富山大学教育学部 教授 田中久雄	集合場所 毎日 第1体育館
2日目	8月9日	火		
3日目	8月10日	水	テニスコース 富山大学教育学部 教授 中川孝	
4日目	8月11日又は 8月12日	木金		

昭和58年度富山大学教養部公開講座

－生 き る－

番号	月 日	曜	講師名	専 攻	題 名
1	10月12日	水	岡村 信孝	哲 学	現代に於ける生と倫理
2	10月14日	金	杉本 新平	倫 理 学	生活と工芸文化
3	10月17日	月	観山 雪陽	哲 学	現代と宗教
4	10月19日	水	濱口 脩	英 語	J. スタインベック『はつかネズミと人間』
5	10月21日	金	別本 明夫	ド イ ツ 語	文学の中の日常性 ヘアータルベルト・シュライフターの 『小春日和』を中心に～
6	10月24日	月	勝野 良一	フランス語	現代フランス推理小説 2つの顔
7	10月26日	水	駒城 鎮一	法 学	社会科学者と信仰
8	10月28日	金	田中 節男	政 治 学	資本主義の精神について(ウェーバー)
9	10月31日	月	海老原直邦	心 理 学	「不安」と「知」のかかわり
10	11月4日	金	稲垣 保彦	保 健 体 育	からだところ
11	11月7日	月	小島 覚	環 境 科 学	カナダにおける生活と自然
12	11月9日	水	塩谷 俊作	化 学	技術文明と人間
13	11月11日	金	佐藤 清雄	物 理 学	物理史にみる客観認識
14	11月14日	月	藤井 昭二	地 学	旅に出て憶うこと
15	11月16日	水	全 員		パネルディスカッション

# 『 出 会 い 』

— 西ドイツ留学だより —

教育学部中学校教員養成課程(音楽)3年次生 内 田 良 美

ドイツにきて5ヶ月が過ぎようとしています。私は今、ロイトリンゲンという町にある教育大学で音楽教育を学んでいます。

この5ヶ月を振り返ってみると、次から次へといろんなことが思い出されます。多くのことを経験し、それを通して色々なことを思いました。初めの頃は、とても不安な、落ち着かない毎日でしたが、今ではここでの生活にも慣れ、充実した日々を送っています。それも、ここにきて多くの人達に出会い、その人達のやさしさに触れ、また、あたたかさに支えられてきたからです。このことが、私の今一番書きたいことです。

9月6日、夜、私はドイツに向けての飛行機に乗りました。あの時の心細さ、不安な気持ちは今でも忘れません。周りは仕事で海外へ出張するといった人が多く、私は誰と話すこともなく16時間“一人ぼっち”でいました。ハンブルクでルフト・ハンザ機に乗り換えるため3時間の待ち合わせ。東京の30℃の暑さに比べ、ハンブルクは10℃。それに加えて天候は雨。そんな中で、とても寒い気持ちでいた私に、そばにいた一人のドイツ婦人の抱く赤ちゃんがにこっと微笑みかけてくれたのです。こんな小さなことでも、この時の私にとっては涙が出るほどうれしかったのです。また、ある日本人の方が、乗り換えの手続きや両替を手伝ってくださり、別れ際、留学しにきたと言った私に「1年間、頑張ってくださいね」と言って励ましてくださいました。そしてシュトゥットガルトへ。ここで、私をわざわざ迎えに来てくださったシュティーフェル教授御夫妻(音楽学)にお会いします。とてもやさしく、あたたかなお人柄の御夫妻には、当地で一番お世話になっています。着いた翌日も、奥様がおいしいドイツ料理を作ってくちそうしてくださいました。

こうしてドイツでの生活が始まるわけですが、私の住んでいる学生寮は、台所やシャワーを共同で使用するようになっていました。その使い方を親切に教えてくれたのが、同じ階のアフリカからの2人でした。外国で生活する苦勞を知っている彼らは、同じ外国人として、私にも親切にしてくれました。

9月半ばから成人教育機構のVolkshochschuleにドイツ語会話を習いに通いました。ここで、アメリカ女性、イギリス女性、スペイン女性等々、多くの人

と友達になりました。この人達とは、たどたどしいドイツ語で、たくさん話もしました。皆、外国での生活に、さまざまな苦勞をしながらもたくましく頑張っています。

そして10月の初め、トゥーン(Thun・スイス)のヴェーラー夫人(富山でのドイツ語の先生のお母様)を訪ねることにしたのです。まずヴェーラー夫人の電話、トゥーンまでの汽車の切符の手配を、友達が手伝ってくれました。トゥーンまでは列車で6時間。乗り換えを3回しなければなりません。この旅でも、色々な人に出会いました。ドイツのチュービンゲンに住むおばさん、オーストリアやアメリカからの留学生、イタリアの太ったおじさん。皆、忘れられない人達です。またトゥーンの駅まで迎えに来てくれたのがハニーとラーキス、それにヴェーラーさんの10才と13才のお孫さん2人でした。ヴェーラーさんは、昼食を作ってくちを待っていてくださいました。“ようこそ”と頬にキスしてくださった時は、心がぽっとあたたまる思いでした。テーブルの上にも歓迎のカード。そしておながはち切れそうになるくらいのおいしいごちそう。ヴェーラーさんのあたたかさにすっぽり包まれたような2日間でした。帰りの列車に乗ってからは涙が出てとまらず、トイレの中で泣いた私です。

やはり10月の初め、ロイトリンゲンに住んでおられる日本人の方を訪ねました。スミエさんとおっしゃいます。昨年留学された同じ教育学部の石倉充紀さんからお名前はお聞きしていたものの、お会いするのは初めてです。玄関のベルを鳴らしながらも少し緊張。そこへ現われたのが5才の坊やミヒャエル君でした。さて日本語で話したのか、ドイツ語で話したのか(御主人はドイツ人で学校の先生です)。そこにスミエさんが出てこられました。スミエさんにも大変お世話になっています。御主人もとてもやさしい方です。音楽が好きな方でピアノの連弾をしたこともあります。

10月半ば、大学の講義が始まります。教授方や秘書の方々、皆さん親切に教えてください。音楽専攻の学生もたくさんいて、何かと助けてもらっています。

また、寮の同じ階の人達も休暇を終えて戻ってきました。一緒に料理を作ってくちを食べて、誕生会を開いた



り、にぎやかにやっています。相談にもよくのつてくれます。この人達も、皆いい人ばかりです。

そしてクリスマスには、同じ階のクラウディアが彼女の家に招待してくれました。家族や親戚の人達と楽しいクリスマスを過ごすことができたのです。

まだまだ他に多くの人と出会いました。私がどんな人達と出会ったかということを書いただけのようですが、これらの出来事を通して、私は今一番「人との出

会い」ということをしみじみ思っています。そのことを述べたかったのです。ドイツの冬は厳しいと聞いていました。しかし私にはあまり気になりません。いつも側にあたたかい人達がいるからと思ったりしています。人との出会い、これからも大事に大事にしていきたいと思います。この次は、大学の講義内容などについて報告させていただきます。(ロイトリングンにて)

## 『私の心のふるさと富山』

富山県費留学生(教育学部) 坂 尻 まゆみ(ブラジル)

時が立つのは早いもので、生まれて初めて日本の地を踏んでから、もう十ヶ月以上も立ちました。留学生として与えられた一年と言う期間も間もなく終ろうとしています。初めがあれば終わりがある。それは当然なことだと分っていたんですけども、今ほど『終わってしまう』と言うことの淋しさを強く感じたことはありません。もちろん自分の生まれ故郷であり、そして家族が待っていてくれるブラジルには帰りたいと思っています。でも今はそれ以上にせめてもう少しの間、日本に居たいと言う気持ちにかられます。

もちろん最初は、なれない所だったので、いろいろな壁にぶつかり、しっばいばかりしてました。でもそのひとつひとつの壁をのりこえながらも、そしていろいろな人との接触の中で、なんだか両親のものの考え方というものが今までよりもっと理解できるようになったような気がします。これからは父母とはいい会話ができるようになるんじゃないかなと思います。

でもなんと言っても日本のこの四季の変化には大変おどろかされました。話では聞いていたんですけども、やっぱりこれだけは実際に見て、経験してみなければ分かりませんね。気候の激しさ、そしてその気候に応じてまるで映画の画面のように変化する一面の景色。なんだか信じられないような気さえしました。ほんとうに絵になる美しさですね。ただ、春の桜といい、秋の紅葉といい、あまりにもあっけなく散ってしまうので、なんだかはかなさを感じました。でも夏があれば暑ければ、秋のすずしさがほんとうに有り難く感じますね。そして冬から春。私は、冬から春を迎えると言うことはまだこれからなんですけれども、やっぱり待ち遠しいですね。でも、このようにしみじみと有り難さをはだで感じられることは、とてもいいことだ

と思います。ブラジルだと暖いのがあたりまえのように思ってしまいますので有りがたいなど、あまり感じたことはなかったような気がします。でもこうも毎日身にしみるような寒い日々を過していますと、暖いブラジルが恋しくなります。雪掻きなどしなくてすむし、でも雪と言えば雪を見るのは初めてです。初雪にはとても感動しました。今でも雪景色の美しさにはいつも見とれています。そして何よりも楽しいのは、やっぱりスキーですね。そこへ行く時だけはどんな寒さも平気な強い元気な子になるんですよ。スキーは決して簡単ではありませんので、まだあまりできないんですけども、おもしろいと言うより、ほんとうに気持ちのいいスポーツですね。とくに海よりも山の方が好きな私にとっては最高のスポーツです。帰国してしまうと、もう雪とは縁がありませんので、もちろんスキーなど考がえもできません。それがとってもざんねんです。日本の長い冬も決して楽ではありませんけれど、スキーヤーの皆がとてもうらやましいですね。でも、一度経験できただけでも幸運に思わなければいけませんね。きっと一生の思い出になるだろうと思います。

勉強の方では、先生方の講義を初め、教育実習や色々な幼稚園や、保育園の見学を通じて、いろいろなことを学ばせていただきまして、ふたたび『教える』と言うことの重要さと難しさ、又楽しさを深く感じさせられました。そして、なによりも自分が保育者として未熟である事を思い知らされました。そしてそれは一年の期間では決して学べるものではなく、常に勉強しつづけなければならぬことを身にしみ感じていきます。とくに今の留学期間では、最初は日本の地に、生活になじむことと、言葉の問題もあり、勉強に集中することもあまりできなかったことと、それからあまりにも

いろいろなことがありすぎて、おちつけない気持ちのまま留学を終えてしまったような気がします。でも、そのひとつひとつの経験はそれなりにいい社会勉強になったような気がしますし、何よりも、人々との接触を通じて、その人々が物事に接する姿勢を見せていただけて、私もこれからはどうあるべきか、と言うことを考へがえさせられました。学べたと言うよりも、『道を開いてくれた』と言うような気がします。だからほんとうの勉強はこれからだと思っています。先生方の講義や演習で話し合ったことや、きびしい教育実習で教えていただいた数々の素晴らしい御指導を『土台』にして、これからは常に勉強しつづけたいと思っています。

そのほか、この一年を振り返って見て、何がよかったかといいますと、タモリさんじゃないんですけどやっぱり『友だちのわ』を広げられたことですね。クラスメートの人たちを初め、富山大学全体の皆様、県庁の皆様、青年団の皆様、そのほか幼稚園児からおじいちゃんまでという、ほんとうに広い友達の輪を地球の反対がわにもてたということは、何よりもうれしいですね。小さかった自分の世界が、だんだんと広が

ってきたような気がします。

日本に来るまでは、日本人でもない、そしてブラジル人でもないような自分がとてもはがゆく感じたんですけれども、私がこう言う経験ができる機会を与えられたのも日系二世だったからこそだと思います。そして、日本で暮らして見て、自分も日本人だなぁとつくづく思うこともありましたし、やっぱりなんとなく違うところもあるような気もしました。でもこんどは、どっちつかずではなくて、自分は日本人であり、又ブラジル人でもある。ブラジルが生まれ故郷なら、日本は『心のふるさと』です。どちらも同じように大切に思うこの気持は、いつまでも消えることはないでしょう。

最後に富山大学のみなさま、この一年は私にとってかけがえのない一年になったんですけれども、それもみんな、いろいろと御迷惑やお手数かけたにも拘わらず、皆様の暖い御支援があったからこそだと思います。決して『ありがとう』の一言で表わせるものではありませんけれど、  
RECEBA OS MEUS SIN  
(うけとって下さい) (私の)  
CEROS AGRADECIMENTOS. MUITO OBRIGADA.  
(感謝の気持を) (ほんとうにありがとうございました。)  
(原文のまま 編集委員)

## 《 来てよかった・・・ 》

富山県費留学生(工学部)久保田・パウロ・欣也(ブラジル)

私はブラジル連邦共和国サン・パウロ市から、富山大学の工学部へ富山県費留学生として学習している久保田・パウロ・欣也です。

日本へ留学する夢は高校生の時からもっていました。でも本当に計画をたて始めたのは大学へ入学してからです。その時は日本語を習うために週3回日本語の教室にかよっていました。

留学生として日本へ行けると知らされたときは、言葉では言えないほどうれしかったです。

うれしかったことと、いそがしかった支度のおかげで4月1日(1983年)には何kgかやせていたが無事に日本へ入国しました。

成田空港へ着いた時は、涙がポロポロでました。なぜかと言うと、なんとなく幼い時から父母から聞いたり、夢に見たりして作っていたイメージの日本を実際に見て、飛行機から見えた田や家が故郷のように、いつかきた所のように感じたからです。すばらしい感動でした。そのため私は二世の日系人としてブラジルで生ま

れたのが、とっても最良だなとも思っています。

名前と写真でみていた親類とあった時は、今ではなくなられた先祖とそっくりだったので、感激しました。

そしてこの数か月大学、工場での学習や観光をさせてもらって社会人としても、いい勉強になりました。

その中でも、一番いい印象と思い出は季節の移り変わりです。それがどのように国民に影響をあたえているかが衣食住とスポーツに表われていて、すばらしい体験でした。

雪は日常生活にトラブルを起こしますが、なんとなく別世界のようで、目とスキーにはとってもいい自然の一つです。

一年が本当にアッと言う間に過ぎてしまいましたけれど、こんなに一生懸命生きてたくさんいい思い出ができて幸せです。

でも、富山の方言と日本人に対してもっと深く理解できないことが、残念だと思います。方言は遊び半分に、"ケ"とか"チャ"を使いますけれど会話の中に

はあまり出てきません。

留学修了後は、これまで学んだことを、工学の分野で仕事に生かし、大学や研修を通じて得た知識をブラジルの企業発展のために役立てたいと思っています。

本当にいろいろな体験をさせてもらって、とってもいい勉強になりました。

富山大学と富山県の皆様へ、ここに厚くお礼を申し

上げます。

どうもありがとうございました。

では、また皆様とあえる日まで、お元気でね！

FELICIDADES E MUITO OBRIGADO !

ATE' A VISTA !

UM GRANDE ABRAÇO !

## ==== 学 部 だ よ り ====

### ☑ 人文学部だより

山口博教授『万葉集形成の謎』を刊行。

本書は『万葉集』成立に関する通説へ疑問を提出す

る著書。272ページ，1280円，桜楓社刊。

### ☑ 教育学部だより

北陸心理学会 6月24日(日)教育学部1棟にて開催。教育・臨床心理学関係の研究発表(午前10時～12時30分)と特別講演会(午後1時30分～3

時。講師は国立教育研究所の天野清先生。演題は未定。)大会参加費：正会員・臨時会員は1,200円，学生会員・学生臨時会員は500円。

### ☑ 工学部だより

昭和58年度において工学部で開催された学会は下記表のように各学会支部講演会6件で、いずれも盛会の中

中に終了した。

	年月日	主催者名	内 容	使用場所
1	5 8. 5. 1 2	日本機械学会北陸信越支部	特別講演会	講義棟8号講義室及び会議室
2	5 8. 9. 3 0	電子通信学 聴支部，応用物学会北陸支部	講演会「光による半導体表面状態の測定技術」	講義棟8号講義室
3	5 8. 1 1. 5	日本伝熱研究会北陸信越支部	講演会	講義棟会議室
4	5 8. 1 1. 1 4	北陸越工業教育協会富山県支部，機械学会共催	講演会	講義棟8号講義室
5	5 8. 1 2. 1	電子通信学会北陸支部	講演会	講義棟会議室
6	5 8. 1 2. 7	金属学会，鉄鋼協会北信越支部	講演会	講義棟8号，9号講義室，会議室，生産機械講義室第1，第2

## ==== 学 生 部 だ よ り ====

### ☑ 共通第1次学力試験の実施について

昭和59年度大学入学者選抜共通第1次学力試験が、去る1月14日(土)，15日(日)の両日にわたっ

て全国一斉に実施されました。共通第1次の制度が始まって以来本年は第6回目のものです。

富山県では、県内で受験を志願している者が4,400名(男2,749名,女1,651名)あり、富山大学3,500名(男2,188名,女1,312名)、富山医科薬科大学(富山中部高校で実施)900名(男561名,女339名)でそれぞれ実施されました。

本学では、試験実施委員会で計画された実施体制に基づき、五福地区6試験場において柳田学長を実施本

部長とし492名の教職員が試験に携わり、初日は国語、理科の2教科、2日目は、社会、数学、外国語の3教科を予定どおり終了しました。

なお、本学関係の受験状況は次のとおりでした。

志願者数	欠席者数	受験者数	欠席率
3,500名	126名	3,374名	3.6%

### ☒ 体育系サークルリーダー研修会について

本年度の研修会は、2泊3日の日程で山野スポーツセンターにおいて下記のとおり実施され、各サークルの代表者が参加し、熱心な討論を重ね有意義に終了することができましたことを報告するとともに、ここにあらためて関係各位に感謝いたします。

#### ●実施概要

期 日 昭和58年10月11日(火)～13日(木)  
(2泊3日)

場 所 富山県体育協会 山野スポーツセンター  
(富山県上新川郡大山町本宮)

参加者 体育会会長 柳田友道  
体育会副会長 本田 弘  
教育学部 教授 中川 孝  
" " 山地啓司

体育会役員及び運動部リーダーの学生約70名

研究項目 ークラブにおけるリーダーの位置—  
(自主性と積極性)  
。活動内容とその問題点

- 。リーダーの条件と後輩の育成
- 。施設問題その他

講 演 "課外活動としてのスポーツ"

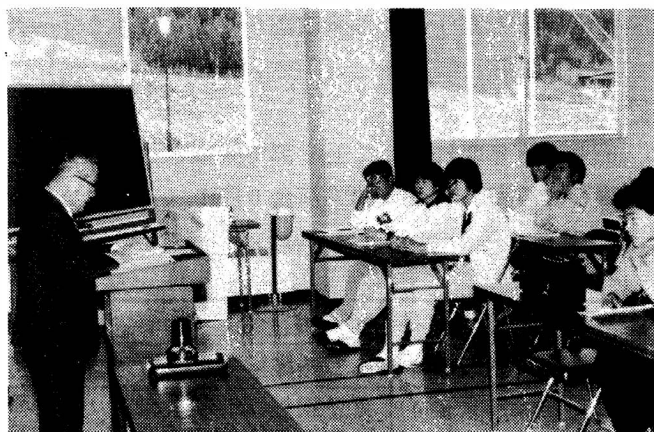
体育会会長 柳田友道

"自主性、積極性を育てるリーダーの条件"

教育学部教授 中川 孝

"望ましいスポーツ集団のあり方"

教育学部教授 山地啓司



### ☒ スキー講習会について

本年度のスキー講習会は、1月7日から13日までの1週間にわたり、約140名の学生が参加し、11名の指導教官のもとに志賀高原ブナ平スキー場を中心として行われた。今回は積雪も多く初日から絶好のコ

ンディションのもとでの講習会となり、多大の成果をあげ無事終了することができました。これもひとえに指導いただいた諸先生方並びに体育会の諸君のおかげと深く感謝いたします。



## ☒ スキー講習会を終えて

昭和58年度スキー講習会は、例年どおり1月7日から13日までの6泊7日の日程で長野県志賀高原にて開講されました。本講習会はスキー技術の向上と体力増強を図るとともに規律正しい集団生活の体験を通じて協調性を養い又、学生間・教職員との懇談により一層の人間形成をはかり、信頼感を高めるという目的のもとに行なわれました。今年の志賀高原は初日からスキーには最適なゲレンデコンディションで我々を迎えてくれました。さらに好天にも恵まれ日中の講習では指導教官の方々、受講生ともども熱のこもった練習ができたことと思います。帰宿後は、班別ミーティングや懇談会さらには映写機を用いての講義などを行ないました。また、講習会の性格上きびしく統制しましたが、参加者にとっては規律正しく充実した一週間を

実行委員長 室 木 成 介

過ごしてもらえたと思います。

講習は実質的には5日間ですが、上級者から初級者までそれぞれの技量に合った変化に富んだゲレンデが数多く存在するため各人十分な練習ができたことでしょう。加えてスキーの醍醐味を味わいながら白銀の世界に包まれ浮かび上がる北アルプスの山々のすばらしさ、雪山のきびしさなど、大自然の雄大さをはだで感じとれたことでしょう。

この講習会を通じて、参加者全員が相互の親睦を深めスキー技術が一段と向上したものと確信します。

最後になりましたが、本講習会に際して、絶大な御協力を賜りました学生部並びに指導教官の方々から御礼申し上げます。

## ☒ 昭和59年度富山大学入学志願者数調

学 部	学 科 ・ 課 程	昭 和 5 9 年 度			昭 和 5 8 年 度			備 考
		募集人員	志願者数	倍率	募集人員	志願者数	倍率	
人文学部	人 文 学 科	90	425	4.7	90	273	3.0	
	語 学 文 学 科	80	202	2.5	80	213	2.7	
	小 計	170	627	3.7	170	486	2.9	
教育学部	小学校教員養成課程	140	176	1.3	140	210	1.5	
	中学校教員養成課程	50	110	2.2	50	148	3.0	
	養護学校教員養成課程	20	43	2.2	20	50	2.5	
	幼稚園教員養成課程	30	74	2.5	30	113	3.8	
	小 計	240	403	1.7	240	521	2.2	
経済学部	経 済 学 科	120	327	2.7	120	469	3.9	
	経 営 学 科	120	544	4.5	120	732	6.1	
	経 営 法 学 科	60	287	4.8	60	432	7.2	
	小 計	300	1,158	3.9	300	1,633	5.4	
理学部	数 学 科	40	78	2.0	40	74	1.9	
	物 理 学 科	(注) 30	88	2.9	40	53	1.3	
	化 学 科	40	83	2.1	40	60	1.5	
	生 物 学 科	30	63	2.1	30	68	2.3	
	地 球 科 学 科	30	68	2.3	30	89	3.0	
	小 計	170	380	2.2	180	344	1.9	
工学部	電 気 工 学 科	50	111	2.2	50	102	2.0	
	工 業 化 学 科	45	104	2.3	45	118	2.6	
	金 属 工 学 科	40	175	4.4	40	127	3.2	
	機 械 工 学 科	50	125	2.5	50	174	3.5	
	生 産 機 械 工 学 科	40	131	3.3	40	125	3.1	
	化 学 工 学 科	40	145	3.6	40	152	3.8	
	電 子 工 学 科	40	68	1.7	40	71	1.8	
	小 計	305	859	2.8	305	869	2.8	
合 計	1,185	3,427	2.9	1,195	3,853	3.2		

(注) 物理学科では入学定員(40人)の一部を留保して第2次募集(10人)を行う。

☒ 学生証の査証について

1. 2. 3年次生は、各学部の学務係（教養部においては学生係）で、昭和59年度の査証を行いますの

で必ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

☒ 現金自動支払機（CD）の設置について

このたび学生会館内に、北陸銀行と富山相互銀行のCDが設置され、2月1日にオープンしました。

取扱時間 平日 9時30分から16時30分まで

土曜日 9時30分から12時まで

◇ 訂正（おわび）

・第43号（昭和58年12月10日）

・5ページ 右欄下から7行目

（ヘルマン・ヘッセ）を

（カール・ブッセ）に訂正します。

~~~~~ 学園ニュース編集委員 ~~~~~

|      |       |     |       |
|------|-------|-----|-------|
| 学生部長 | 本田 弘  | 理学部 | 松本 賢一 |
| 人文学部 | 山口 幸祐 | "   | 広岡 公夫 |
| "    | 釘貫 亨  | 工学部 | 多々 静夫 |
| 教育学部 | 大塚 恵一 | "   | 杉本 益規 |
| "    | 山本 都久 | 教養部 | 高安 和子 |
| 経済学部 | 今井 晴男 | "   | 山本 孝一 |
| "    | 小原 久治 |     |       |